



廿日市警察署  
交通課長  
おおはし きよはる  
大橋 清治さん

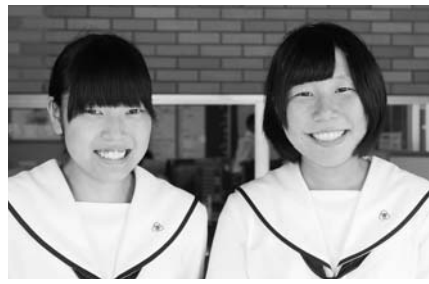
## 自転車もちょっとした気の緩みで「凶器」になるということを忘れないで。

自転車は、「車」の文字が入っているように、「車両」です。自転車の運転には、自動車と同じ道路交通法の適用があります。

また、自転車による事故でも、その被害の大きさにより、数千万円の賠償金を支払わなければなりません。事実7月には、自転車事故で9,520万円の賠償命令が下されたケースもあります。

何より、「自転車だから大丈夫」「事故を起こしても大事にはならない」。そんな軽はずみな気持ちが死傷者を出す重大な事故につながります。

音とかがすごくて、スタントだって分かっててもびっくりしました。交通事故って、テレビや新聞のニュースの中だけの話で、自分たちには関係ないと思っていました。しかし、スタントマンさんの体を張ったスタントを見て、自転車でもこんなに大きな事故になるんだと実感しました。18歳になり、車の免許のことも話題に出ます。改めて交通事故を起こさないよう気を付けたいと思います。



廿日市西高校3年生  
ありかわ・あかり きじま・さやか  
有川 明里さん 木島 沙也香さん



南シャドウ・スタント  
プロダクション  
つるがい・りゅうた  
鶴貝 龍太さん

## 皆さんが事故に遭わないために、私たちは日々、事故に遭ってますー

交通安全に関しては、いくらお話をしてもなかなか理解してもらうことは難しいです。だから事故を目の当たりにして、交通事故の怖さを知ってもらいたいと考えています。

生々しい衝突音や、人が車にはねられる様子を見ることで、その「事故の激しさ」や、「被害者の痛み」を感じてもらえればと思っています。

一番怖いのが、自転車に乗っている姿が、いつも車から見えていると思いこんでいること。車からは見えていないと思って常に安全確認をしてください。

「危ない」、「ぶつかると」。グラウンドに大きな悲鳴が響く。次の瞬間、「ドン！」という低く、鈍い衝突音とともに、自転車に乗ったスタントマンが、車にぶつかった。

これは、「スケアード・ストリート」と呼ばれる教育方法。恐怖を実感することで、危険な行為を予防しようというもの。7月17日、廿日市西高校(脇田康則校長)で、スタントマンを活用した交通安全教室が開催された。

# 交通事故の怖さ再現

廿日市西高校で、スタントマンによる自転車交通安全教室



死角のある交差点で、「止まれ」の標識があるにもかかわらず、一時停止せずに横断しようとしたところを乗用車にはねられるスタントマン。数メートル飛ばされると、生徒たちからは大きな悲鳴が上がった。



横断歩道前で、車が歩行者を渡らせようと、一時停車した脇を安全確認をしない自転車が走り抜き、歩行者をはねる事故。



トラックが左折時に、内輪差により、脇を走行中の自転車を左後輪に巻き込む事故の再現。



自転車と人がぶつかった事故。自転車の運転者も加害者になるということを改めて示した。



自転車同士の衝突では、ヘルメットのおごひもをしていなかった場合、大きなダメージを受けることを再現。

た。携帯電話を操作しながら乗車したり、車道の右側を走行したりと、さまざまな違反をしながら自転車運転。事故が起こるシーンでは、生徒から大きな悲鳴があがった。

また、横断歩道で止まった車の横を通り過ぎる際の事故、トラックの内輪差による巻き込み事故、車の死角による巻き込みなどを実演した。実演のあとには、なぜ事故が起こったのか、どうすれば事故を防げたのかを検証。生徒たちは、誰もが真剣なまなざしでその様子を見つめていた。実際に目の前で事故を経験する。その意味は大きい。

脇田康則校長は、「自転車の事故を軽くみないでほしい。今日を機に、自転車の運転を見直してほしい」と話す。

最後の事故実演では、被害者役のスタントマンが事故後しばらく動かず、スタッフが慌て始めた。生徒らも「マジ?」「ヤバいんじゃない?」とざわつき始める。しかしそれは演技で、その後、スタントマンが立ち上がると、生徒たちから安堵の声があがった。

## 事故を目と耳で体感

教室は、自転車を利用する機会が多い高校生に、自転車の交差点や交通事故の危険性を理解してもらうのが目的。自転車は、身近な交通手段として広く利用されているが、全交通事故の約2割を占めるとともに、走行マナーの悪さも指摘されている。そうした背景を受け、広島県警察本部では、JA共済連広島本部の協力のもと、平成22年度から年2回、県内の各学校で開催している。